

幼児の描画指導の効果について

—— 認 識 的 指 導 法 を 中 心 に ——



山 本 道 子

戦後の美術教育の革新的な変化は創造美術教育の運動によって
いちはやく打出され、その残した功績の大きいことは周知の通
りである。この運動では主として幼児の情緒に訴え、記憶や想像
によって好むところの絵を自由に描かせようとするもので、絵を
描く力だとか、創造力とかを先天的なもの、本能的なものとする
考えのもとに、抑圧解放、干渉の否定を強調することによって生
得の創造力を自然に伸ばすことができるかと考えるものである。確
かに自由のびのびと描かせることは、特に幼児の場合、欠くこ
とのできない一つの要素であるが、外的規制の欠如のため放任主
義的教育が、いかにも新しい創造教育の如く、はき違えられた傾
向にあったことも事実である。ところで、このような反省の上に
立って現われた批判的主張の一つにリアリズムの立場に立つ認識
的指導を挙げることができる。この立場は創造力は現実の認識か

ら生まれるものであるから、子どもたちに好むままに自由に描か
せ、内部的精神の発展を信頼するだけでは不十分であるとの見解
から、もっと積極的に子どもたち相互の話し合いなどを媒介とし
て主として視覚的認識を確かにさせるべきであると主張する。前
者が情緒、想像、心象によって描かすのに対して、後者は生活を
描き視覚造形的な表現を重視している。ところが、このような認
識的指導が主張され始めてからまだ日が浅い故でもあろうか、現
場において実践的にこの考えに基づいた指導が行なわれることは
いまだ少なく、従ってその功罪についての研究も数少ない現状で
ある。そこで認識的な指導法の効果を確かめる一つの手がかりと
して今回は次のような実験的試みを行なってみた。

研究方法

対象は、やや傾向の異なると思われるA、B、C、の三園を選び、各園の5、6才児、男女計168名である。

A園では認識的立場を比較的尊重していると思われる園であり、B園では特に組織的指導をしていないと思われる園、そしてC園は創美的立場を尊重していると思われる園である。

方法は、胡瓜と蛸とをそれぞれ次に述べる三つの方法で園児に描かせた。

(1) 想像画：画題のみを与え自由に描かせる。

(2) 写生画：実物を自由に眺めさせ好きな場所で描かせる。しかし写生画といっても写実的表現を求めず、次に述べる指導画の前段階として試みたものである。

(3) 指導画：ここでいう指導画とは、技術的指導でなく、談話とともに実物を見たりさわったりして幼児の自発的興味を誘発しつつ、形、色など、対象の本質とか属性を子どもなりに感得させて描かせようとするものである。

なお、胡瓜と蛸を選んだ理由は、前者は日常的なもので、いかにも平凡そうに見えても色あいの変化とか、イボのようすや花おち、枝つきなど、幼児が日頃親しんでいるわりには見落しがちなポイントを定めやすく、視覚的、触覚的観察の対象として適していると考えられ、また後者は絵本で見るとか、食べ物として何らかの身近な体験をもっているにもかかわらず、概念的なものとし

てしか知らない。だからなまの生きた蛸を見せることによって蛸独特な様態を示すことで子どもに刺激を与え、興奮させて描写意欲を起こさせること、また実物観察を経験する前と後ではどのような差違が描画に表われるかおもしろい、などの理由による。

使用クレヨン各自のもので、欲している色の欠けている時は貸し与えるよう配慮した。画用紙は8つ切。時間は制限しない。

結果及び考察

1、胡瓜について

まず、個々の絵を評価したのであるが、評価の基準は形の良否、イボの有無、色の複合の状態を三つのポイントとし、その表現の状態をも考慮し、各項目を4段階（0点から3点まで）に分類した。その他、花おち、枝つきなどについても調べた。その結果は表1であり、それを図示したのが図1である。

色の複合とは、一本の胡瓜における花おち（先端部）から枝つき（なっている時、枝につながる部分）への色の変化を指し、混色とは、対象独特の緑色を苦心して他の色と混ぜて描いたものを指す。（一くちに緑色といってもクレヨンの色そのままではない）

表1及び図1から分るように年令にかかわらず全体として評点は想像画、写生画、指導画の順によくっており、特に評点2の増

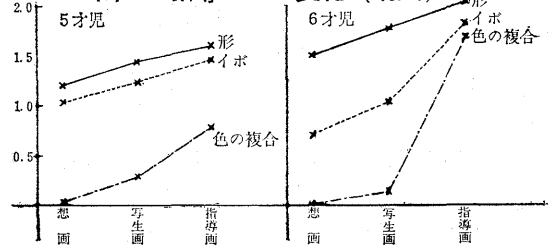
表1 指導による変化(胡瓜)

%

年令	観点 評点		形				イボ				色の複合				花 おち	枝 つき	混 色	例 外	
			3	2	1	0	3	2	1	0	3	2	1	0					
	指導方法																		
5才	想	画	3.1	26.2	58.4	4.6	1.5	20.0	60.0	10.8			4.6	87.7		15.4	4.6	7.7	
	写	生	画	6.2	32.8	57.9		6.2	18.8	64.1	7.8	1.6	6.2	10.9	78.2	9.4	12.5	6.2	3.1
	指	導	画	6.4	51.3	35.9		3.9	48.7	34.6	6.4	2.6	29.5	12.8	48.7	12.8	6.4	20.4	6.4
6才	想	画	12.5	33.3	45.8		8.4	16.6	12.5	54.1			91.6		20.8		8.4		
	写	生	画	17.4	52.2	21.7		17.4	17.4	17.4	39.1		4.4	4.4	82.5	13.1	17.4		8.7
	指	導	画	30.4	43.5	26.1		8.5	65.2	26.1		17.4	47.8	21.7	13.1	13.1	52.1	4.4	

加が目立っていることは注意すべきである。この中間層こそ適当な指導によって観察、認識、表現などに大きく進歩する可能性をもった最大多数の層であると考えられるからである。形、イボ、色の三つのポイントのうちでは、この順序で子どもの認識としてとらへやすく、色の微妙な変化は子どもにとって認識しにくいと思われた。次に5才児と6才児を比較してみると、勿論全体的に6才児の方がよい。特に形については評点3(最高点)に入るものが多い。イ

図1 指導による変化(胡瓜)



ボについては5才児は想像画において多数の者が表現しているが、指導画においてもなお表現しないものがあつたりするのに対し、6才児では想像画において表現しているものは半分以下であるが、指導画では100%の者が表現している。色の複合は、一般的に一番評点が低く、想像画で表現するものは非常に少ないが6才児では指導画で90%近い者が表現するようになってくる。これに対し、5才児では50%の者しか表現していない。枝に多くの部分を描いているものは、6才児は指導画の方が想像画の2倍を示しているが、5才児では余りその差はない。以上述べたように形、イボ、色の複合の三つのポイント及び枝つきなどの点に関して、想像画、写生画、指導画の順に両年令ともに向上してはいるが、6才児の方が5才児より指導効果が顕著にあらわれる。この理由の一つとして両者の観察力、認識力の差が考えられる。次に個別に比較してその特徴をとらえてみよう。

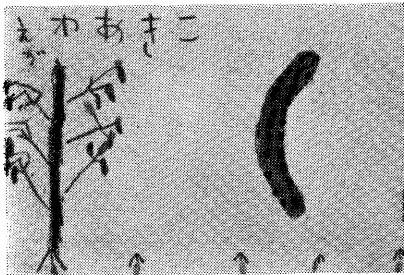
A園(都合により5才児のみであるが)では、色の複合が僅か

ながらも想像画において表現されているが、他園では見られず、また混色においても他園よりよく表現している。また形では想像画から写生画における進歩が大きい。これらは当園児の観察態度に関係しているように思われる。

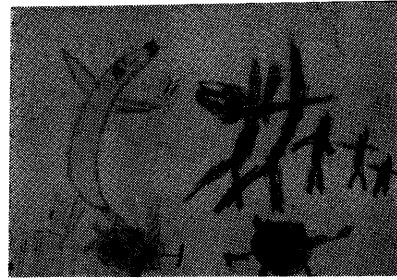
B園では、各項目とも指導画は写生画に比していちじるしく進歩している。色の複合については5才児、6才児とも写生画において全く表現されていないのが指導画では相当の割合のものが表現している。これらから視覚的刺激のみによるよりは、やはり手に取ってさわったり話し合うことが認識を深めるのに重要であると考えられる。

C園では、5才児は形、イボは写生画で評点が低下している。

また指導画で例外が多くなっているが、他園での例外はほとんど錯画的であるのに対し、この園ではバナナと胡瓜の競争(写真①)とか、果物の行列など、想像的物語の傾向のものであり、また6才児においても同じ傾向を示し、胡瓜のなっているところを想像したものなど、目の前の胡瓜という対象そのものに興味を集中するよりは他の要素をつけ加えて、あるシチュエーションを作り上げて表現する傾向はC園の特徴といえよう。だから胡瓜だけを切りはなして評価する場合、その評点が悪くなるのは当然のことと思われる。写真②はその一つの例であるが、この絵では大きな木が描かれている。これは話し合いの中で胡瓜の木という言葉を一



②



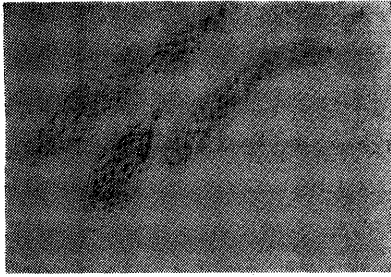
①

言使用ってしまったので、いわゆる木を連想したものと思われる。これは話し合いが不適當であった例であり、やはり観察の必要性、指導に当たっての言葉の表現のむずかしさを反省させられる。幼ない子どもほど、話し合いの内容はもちろん、言葉の表現により大きく左右され、鋭敏に反応するものであるから注意すべきことである。

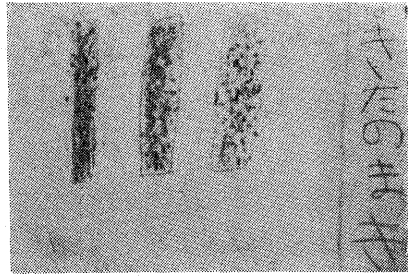
以上述べたことから考えて、A園における観察力の表われは、同園の指導方針の効果が表われているとも思われる。またC園における例外の絵の性質とか描画の内容からも、自由奔放に描けるということとは、これまたC園の特徴と見てよいのではなからうか。

写真説明

写真③、④、⑤は胡瓜の想像画、写生画、指導画の、同一の子ども



④



③

の変化を見るために選んだものである。簡単に説明を加えると、写真③は想像で四角い胡瓜になっている。これが写生画（写真④）になると、丸味をおび枝つきも表現されて、外形や細かい点で改善されている。写真⑤は指導画で、この写真では分らないが、混色が表現され、イボには赤が使用されている。これは胡瓜のイボの先端をよく見ると少し茶色っぽいのを表現したのであらうと思われる。

今述べた写真例でも分るよう
に、一般的な印象批評をするならば、想像においては形、大きさがさまざまに極端に大きいも、小さいもの四角いものなど、およそ胡瓜らしく思われないものも多かった。それが写生画になると大きさが大体揃って極端なもの余りなく、花おち、枝つきも描かれる



⑤

ようになる。そして指導画になると、色の複合や混色が増え、イボも力強く描かれ、中には二重まるによってトゲの周りのふくらみさえ表現するものも現われ立体感の感じられるものもあり、胡瓜としてりっぱな絵になってくる。また花をつけたり、つるをつけたり内容的にも豊かになってくる。

2、蝨について

胡瓜と同じく個々の絵について評価した。

その評価の基準は、吸盤の有無、胴の形、足の形の良否の三つをポイントとし、各項目を3〜4段階（胴の形は3段階、吸盤と足の形は4段階）に分類した。その他、頭部の有無、目の位置、目玉の状態、色についても調べた。その結果は表2であり、それを図示したのが図2である。

全体的に想像、写生画、指導画における評価の変化は対象が動的であるせいか胡瓜ほど顕著に表われていないが、胡瓜と同じく一般に想像、写生画、指導画の順によくっており、表現も形の大きい充実したものが増え、中にはすばらしいでき栄えの絵もあ

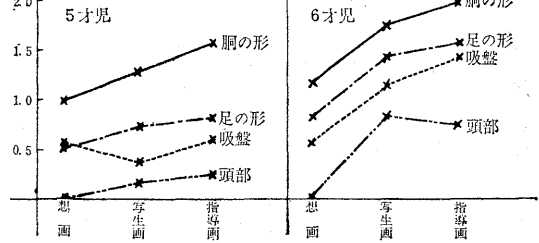
表2 指導による変化(蛸)

%

年令	観点 評点		胴の形				吸盤				足の形				頭部			例 外
			3	2	1	3	2	1	0	3	2	1	0	頭有	目の位置	目玉		
	指導方法																	
5才	想画		12.2	75.6	1.2	15.9	23.1	47.6	12.2	26.8	48.8							12.2
	写生画	4.2	37.5	41.6		12.5	12.5	58.4	2.1	20.8	25.0	35.4	2.1	10.4	2.1			16.6
	指導画	14.6	37.5	37.5		14.6	31.2	43.7	4.2	25.0	18.7	41.6	6.2	14.6	4.2			10.4
6才	想画		22.1	7.5	2.9	16.2	14.7	63.3	27.9	27.9	41.3			1.5				2.9
	写生画	17.4	43.5	36.9	8.7	41.3	6.5	41.3	17.4	30.4	32.6	17.4	19.5	43.4	19.5			2.2
	指導画	27.7	44.7	25.5	10.6	42.6	25.5	19.1	17.0	36.2	34.0	10.6	19.1	36.2	19.1			2.2

る。胴、吸盤、足の中
では胴に一番よく注意
を向け、次に足、吸盤
の順となっている。
これは胡瓜の場合と同
様、細部より基礎的な
形に目を向けやすい傾
向の表われであるとい
える。色については、
想画では赤を62%の者
が使用しているが、写
生画では赤が32%に減
少し、茶色(こげ茶を
含む)、ねずみ色、はだ
色が50%近くまで増加
している。指導画で
は茶色がぐっと増え55
%、白色またはねずみ
色が17%を占め、赤は
12%に減少している。
(生きている蛸の実際

図2 指導による変化(蛸)



れていないが写生画、指導画には表現されてお
り、その率は6才児の方が大である。吸盤の表現は6才児ではよくなっているが、5才児ではむしろ写生画では少し減退している。色については、6才児の方が写生画、指導画を経るにつれ、蛸の実際の色に近づく度合が5才児よりずっと大きい。このように6才児は5才児より写生画での変化がいちじるしく、これは観察力と技術力における相違に帰することができよう。反面、既成概念と思われる赤色は想画において5才児より6才児の方が多く、5才児は多種

の色はうすねずみ色で、やや鮮度が落ちると黄土色がかってくる) 前述したように胡瓜における色の微妙な変化は認識されにくかったが、蛸の色については想画、写生画、指導画と大きく変化している。これは実物の観察により既成の概念から脱したといえる。またよくいわれる概念くだきの一例とも考えてよいのではなからうか。5才児と6才児を比較すると、勿論全体的に6才児の方がよい。頭部は想画において殆んど表現さ

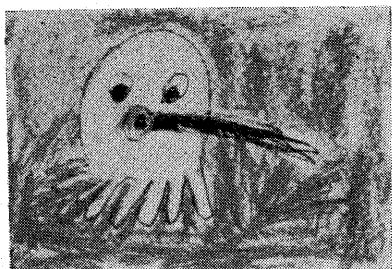
の色にわたっている。

次に園別に比較してみよう。

A園では、頭の形は5才児、6才児とも写生画、指導画と上昇傾向にあるが、他園においては全く表われていないか、または指導画で減っている。色については一般的傾向に同じであった。

B園では、胡瓜と同じく5才児と6才児の差が各項目にわたって大である。特に吸盤においては、6才児は他園よりよい。これはその時の蛸の吸盤の吸引力が他園におけるそれよりも非常に強く、子どもの関心、注意を特に強く刺激したためであろうと思える。色についてはA園と同じく一般的傾向と同じであった。

C園では、5才児は色が写生画において多種にわたっており、

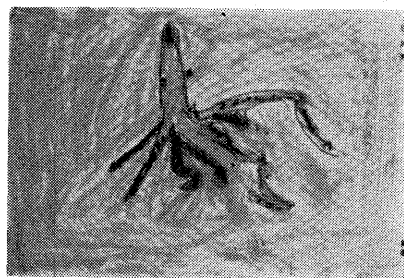


⑥

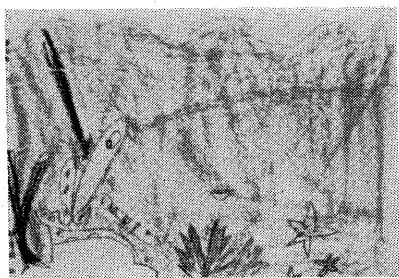
想画においてすでに赤色は用いられていない。これは胡瓜の場合と同じく、対象に即するより自己表現的であるC園の特徴と考えられる。

写真説明

写真⑥～⑩は、蛸の想画、写生画指導画の典型的なものであり、⑥⑦⑧及び⑨⑩はそれぞれ同一の子どもの作品であるから変化の有



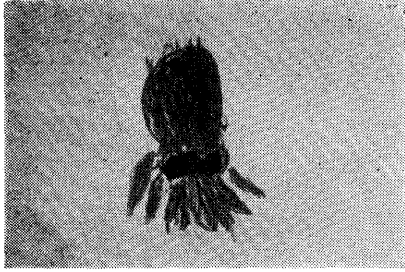
⑦



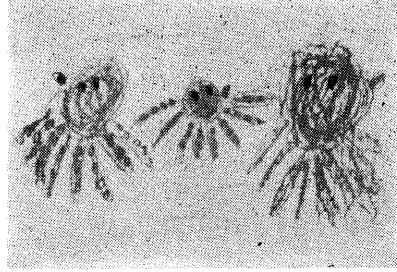
⑧

様がよく分つてもらえよう。簡単に説明を加えると、写真⑥は想画で擬人化された丸い顔、スミをだしている状態など概念的である。それが写生画になると、(写真⑦)色は黄土色になり細長く、足はくねくねとした曲線をもち、イボが黒い点で表わされ、目の位置や描き方など、全体としていかにも生きた蛸の感じがよくとらえられている。写真⑧の指導画になると、蛸そのものは余り変化がみられないが海底のようすがつけ加えられ、蛸を生活の場に置いて、岩の上でスミを吐くようすがいかにも生き生きとおもしろく描かれている。

写真⑨は想画で、色は赤で形も概念的な絵である。これが指導画になると、(写真⑩)色は茶色になり、また目の位置が変わり、正し



⑩



⑨

く頭部の位置として表現されてくる。そして力強く、全体としてのプロポーションもうまく描けている。なお、前の子どもの場合(写真⑥・⑦・⑧)は、手長蝮を材料にしたが、この場合は、飯蝮で手長蝮と違って足が短く、全くここに描かれているような形をしていることをつけ加えねばならない。想像から指導画へのこの変化は同一人物とは思えないほど立派な絵を描いている。

これらの写真例でも分るように、一般的な印象批評をするならば、想像では赤い丸の中に目や口を描いた擬人化的な顔に線描きの足がついているというのが多い。それが写生になると、実物の提示による刺激が強くと子どもたちは大変な興味を示した。そのせいか描画における伸びが非常によく胴が

楕円に変化し、足の形も線描きから足の厚み、くねり、足先などが表現されるようになり、また目や口を、ほとんど全部の子どもが胴の部分に表現していたのが足に近い頭部に表現するようになる。一方、いわゆる写生をしようとして足を無理に開いてグロテスクな軟体動物的形状を呈したりして、少々形の変なものもあるが、子どもなりによく見て写生しようとする努力がよくうかがわれ興味深かった。

指導画になると、今述べたように写生画と指導画の間の差は、想像と写生画ほどよくはないが、話し合いの中ででてきた岩やら蝮つば、海底などが描き加えられ、自由な発想や、自在な想像力が画面に表現され内容が豊富になってきて、蝮自身にも生き生きと力強い動きが感じられる。

いま一度簡単にまとめてみると、描画には日頃の指導傾向がかなりの影響を与えるようであること(園別の考察参照)、適当な指導により大多数の子どもが大きく進歩する可能性を持っていること、特に6才児の方が指導効果が大きいこと、また視覚的刺激だけでなく効果があるが、更にこれに加えて触覚刺激、話し合いなどの適切な指導によって、より大きな効果を収めるであろうと考えられる。

(姫路短期大学)